



キャンパス・コンソーシアム函館
合同公開講座

函館学 2010

第1回講座
講義資料

「北大水産学部 いま・むかし」

米田 義昭 北海道大学名誉教授
NPO法人どうなん「学び」サポートセンター理事長

■ 新水産・海洋都市はこだてを支える人材養成および

「足田豊治写真展」(7/17～8/27開催)の紹介

申 東煥 北海道大学大学院水産科学研究所
水産・海洋コーディネーター養成事務局

日時：平成22年7月10日(土) 午後2:00～3:30

会場：ロワジールホテル函館

主催：キャンパス・コンソーシアム函館

講師略歴

まいた よしあき

米田 義昭 氏

北海道大学名誉教授

NPO 法人 どうなん「学び」サポートセンター理事長

昭和12年函館市生まれ、昭和30年市立函館東高等学校卒業、同年北海道大学水産類に入学、同大学大学院修士課程・博士課程を経て、昭和37年北大水産学部助手に任用、昭和55年助教授、昭和58年教授、北大水産学部長・大学院水産学研究科長を務め、平成12年退官。専門分野は、海洋生産学、海洋化学、生物化学。北大退官後は、函館地域産業振興財団副理事長（北海道道立工業技術センター長）を歴任、また当地域における国際水産・海洋都市構想の推進などに寄与し、平成17年函館市文化賞、平成20年文部科学大臣賞を受賞。

所属学会：日本水産学会、日本海洋学会、日本海洋学会沿岸海洋部会

平成21年からは、NPO法人どうなん「学び」サポートセンター理事長を務める。

しんどうふあん

申 東煥 氏

北海道大学大学院水産科学研究院

水産・海洋コーディネーター養成事務局 産学連携研究員

昭和47年韓国京畿道高陽市生まれ、平成3年～5年 大韓民国空軍第11戦闘飛行団に武装整備士として所属、平成10年韓国延世大学校卒業、平成11年北海道大学大学院水産学研究科水産増殖学専攻博士前期課程入学、平成16年 同 水産科学研究科生命資源科学専攻博士後期課程修了（博士号：水産科学）。平成16年～21年21世紀COEプログラム研究員（北海道大学大学院水産科学研究院）、平成21年より水産・海洋コーディネーター養成事務局産学連携研究員を務める。

北大水産学部のいま・むかし

北海道大学名誉教授 米田 義昭

レジメ

I. 水産学部の沿革

- 1) 札幌時代 1879～1934年 [明治12年～昭和9年] (55年間)
水産学の誕生から学科創設まで 1879～1906 [明治12年～明治39年]
農学校水産学科から北海道帝国大学付属水産専門部まで(1907～1935年)
[明治40年～昭和9年]
- 2) 函館時代 1935～現在 [昭和10年～現在] (75年間)
函館高等水産学校 1935～1944年 (昭和10年～昭和18年)
函館水産専門学校 1945～1949年 (昭和19年～昭和24年)
北海道大学水産学部 1948～2000年 (昭和24年～平成11年)
北海道大学大学院水産学研究科(院) 2000年～現在 (平成12年～)

II. 教師と学生の気質

- 1) 札幌農学校時代に水産学を講じたカッター博士
- 2) 海藻博士 遠藤吉三郎教授と函館
- 3) 疋田豊治教授のガラス乾板写真
- 4) 斉藤教授・石原助教授と愛弟子の話

III. 更なる飛躍をめざす大学院水産科学研究院

- 1) オープンキャンパス
- 2) 高校生限定プログラム

講話の概要

はじめに、明治維新から間もない時期より幾度かの変遷を経て今日に至った水産学部の沿革をкаいつまんで話します。次に、一世紀にわたる国内外の動乱の時代に生きた何人かの教師やその弟子たちを通して水産学徒の気質に触れてみたいと思います。最後に、現在の大学院水産科学研究院の活動の様子を紹介します。

I. 水産学部の沿革

1) 札幌時代(1879～1934)

官制による水産学科の設置は1907年(明治40年)で、2007年に100周年を迎えましたが、御雇い教師だったカッター博士が札幌農学校一期生に海洋生物を講じた1879年(明治12年)から数えると131年になります。この年に行われた水産の教育は国の内外における水産学教育の始まりであったと思います。その後、水産学の教育と研究は札幌を本拠地として55年間にわたり様々な組織改革を経、北海道帝国大学付属水産専門部を最後に札幌から函館に移ることになりました。



卒業を前にした札幌農学校二期生(はじめて水産学を受講した人たち)
前列左から町井、諏訪、ビーボディ、フルックス、カッター、宮部、高木
後列左から足立、太田(新渡戸)、内村、鶴崎、藤田、南、広井、岩崎

北大水産学部七十五年史よりコピー

2) 函館時代(1935～現在)

国の予算が決まり、函館市の寄付による土地、実験室、養魚用温室などを含む諸施設が完成した1935年(昭和10年)に函館の地に移りました。校名も北海道帝国大学付属水産専門部から函館高等水産学校となりました。以来、組織変更などはありませんでしたが、今日までの75年間の長きにわたって函館市民と共に歩んでまいりました。何故札幌から函館に、また大学から専門学校に変わったかについては



函館高等水産専門学校正門

足田豊治教授(1882～1974)のガラス乾板写真集より引用

大変複雑な事情があり短時間では述べ切れませんが、当事の国内の情勢、教官およ

び学生達の思い、函館市の強い支援などが大きな要因になっていると思います。

II. 教師と学生の気質

函館市民の年配の方は、水産の学生達は「やんちゃ」、「バンカラな気風」、「男っぽい」などの印象を持っている方が多いと思います。札幌時代から歌われてきた「男の歌」を1つ聴いても、その雰囲気を感じられると思いますので、その一節を紹介します。

私しゃ大島荒磯育ち ハイノハイト	波も荒いが気も荒いよ ヨハイノハイト
糧は尽きても元氣は尽きぬよ ハイノハイト	意気でかためた荒男よ ヨハイノハイト
板子一枚地獄でござる ハイノハイト	腰の短刀は伊達じゃないヨサハイノハイト
忍路出るときゃ涙で出たが ハイノハイト	今じゃ千島で鯨とり ヨサハイノハイト

水産学を志した教師や学生の中には、刹那的な水産魂を謳歌した凡人ばかりでなく、すぐれた仕事を残した非凡な人も多くいます。世界的に見てもそれらの人たちが残した業績はいまなお燦然と輝いております。思いつくままに何人かの先輩を紹介すると共に彼らのエピソードを述べたいと思います。



遠藤吉三郎教授が発見し、函館の名を付けて命名した海藻ウガノモク

III. さらなぬ飛躍をめざす大学院水産科学研究院

最後になりますが、21世紀に入り、平成の大改革と言われる時期を凌ぎ、いま学部は大きく変貌しました。北海道大学は大学院を主体とするいわゆる大学院大学になりましたが、水産学部も平成12年の大学院重点化を経て、現在は水産科学研究院と称しております。したがって、水産学部は研究院の下に釣り下がった教育組織であると言えます。

現役のスタッフ、学部学生や大学院生に求められている大きなミッションは3つあると思います。1つは水産科学分野における世界に冠たる「知の集積」、そしてもう1つは地域貢献(水産・海洋分野における産業拠点の形成をめざす研究・技術の開発)、そして最後に何よりも重要な若い人材の育成の3つです。

最後に、水産学部のホームページからつぎの2つを引用して後輩たちが地域の皆さんと共に歩む姿を紹介したいと思います。

函館キャンパス実施分					
8:40~9:00	受付【オープンスペース入口】				
9:00~9:45	模擬講義【オープンスペース】 講義題目:海の無脊椎動物の社会行動 担当:和田 哲 准教授		オープンラボ (自由見学)	パネル展示 【オープンスペース】	
9:45~10:15	入試説明会【オープンスペース】 担当:五嶋 聖治 教授				
10:15~12:30	研究室探検ツアー	おしよろ丸ツアー	入試相談会(個別) 【セミナールーム】 担当:五嶋教授 今野教授		
昼休み					
13:00~13:30	受付【オープンスペース入口】				
13:30~14:00	入試説明会【オープンスペース】 担当:五嶋 聖治 教授		オープンラボ (自由見学)	パネル展示 【オープンスペース】	
14:00~16:10	研究室探検ツアー	おしよろ丸ツアー			入試相談会(個別) 【セミナールーム】 担当:五嶋教授 今野教授
16:10~17:30	懇親会(オープンスペース・立食)				

①実施日:8月2日(月)

②会場:函館キャンパス産学官交流プラザホール

由参加プログラムに参加される方は、右の【参加受付カード】
要事項をご記入の上、開催当日ご持参くださいますようお願いいたします。

[【参加受付カード\(PDF\)】](#)

水産学部 高校生限定プログラム

高校生限定プログラム		自由参加・父母等対象プログラム		
8:40~9:00	受付【オープンスペース入口】			
9:00~9:30	入試説明会【オープンスペース】			
9:30~9:40	嵯峨 水産学部長 挨拶			
9:40~9:50	開講式・オリエンテーション【オープンスペース】			
9:50~12:30	実験群1		キャンパス ツアー	入試相談(個別) 【セミナールーム】
	実験1 海洋プランクトンの多様性 担当:山口 篤 准教授 定員:15名	実験2 分子レベルでのサカナの筋肉の動きを再現しよう 井上 晶 准教授 定員:15名		
昼休み				受付【オープンスペース入口】
13:30~16:10	実験群2		キャンパス ツアー	入試相談(個別) 【セミナールーム】
	実験3 君はサカナ君になれるか? -魚類の多様性を知ろう 今村 央 准教授 定員:15名	実験4 チョウザメとウナギの解剖とDNA抽出 井尻 成保 准教授 定員:15名		
16:15	閉講式			

①実施日:8月3日(火)

②会場:函館キャンパス産学官交流プラザホール

新水産・海洋都市はこだてを支える人材養成

申東煥（北海道大学大学院水産科学研究院 水産・海洋コーディネーター養成事務局）

函館市は、海に囲まれた自然および歴史・文化に恵まれた観光都市であり、古くから水産業を基幹産業のひとつとしてきた。函館市には、水産・海洋をとりまく課題解決や産業創出を担う多くの学術研究機関や関連産業が集積し、学術研究開発を高度化できる環境が整っている。このような地域の優位性を活かし、水産・海洋に関連した学術研究の発展を基盤として、現代社会が抱えている食糧・環境等の課題克服と産業発展に貢献できる豊かなまちづくりを目指している。

市は、地域再生の取り組みとして「函館国際水産・海洋都市構想」を策定し、「一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構」を設立した。この国際水産・海洋都市の実現のために、海洋・水産科学分野をはじめとする広い知的経験を有し、機構の機能的な運営をコーディネートできる人材の養成が急務である。

そこで、大学等が有する個性・特色を活かし、将来的な地域産業の活性化や地域の社会ニーズの解決に向け、地元で活躍し、地域の活性化に貢献し得る人材の育成を行うため、地域の大学等が地元の自治体との連携により、科学技術を活用して地域に貢献する優秀な人材を輩出する「地域の知の拠点」を形成し、地方分散型の多様な人材を創出するシステムを構築する「地域再生人材創出拠点の形成」として、「新水産・海洋都市はこだてを支える人材養成」事業が平成21年度より始まった。

本事業は、「水産・海洋コーディネーター」および「海のサポーター」を育成することを目標としている。「水産・海洋コーディネーター」は、選抜された行政人・企業人等を対象として、基礎的な海洋・水産科学知識および技術を習得し、産業や政策に結びつける知的経験基盤を養うことを到達レベルとする。養成された人材は、函館国際水産・海洋都市推進機構に「水産・海洋コーディネーター」として登録され、本プログラムで修得した能力を構想実現に活かし、持続可能な産業活力、産学官連携の強化、新産業を創設、観光と学術研究の融合、水産・海洋と産業・市民生活の調和など函館国際水産・海洋都市の実現にむけ広範囲での活躍が望まれている。一方、「海のサポーター」は、本プログラムの一部に市民が参加し、水産・海洋科学と市民をつなぐ様々な関連事業で協働できることを活動目標とし、豊かで生き生きとした“新水産・海洋都市はこだてを支える応援団”として期待されている。



講義および実習・実験の様子